

表紙, 目次, 抄録, 雑報, 會報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37884

大正七年二月一日發行

金澤醫學
專門學校
十全會雜誌

卷三十二第

號貳第

(號五十四百第)

金澤醫學專門學校十全會

金澤醫學專門學校 **十全會雜誌** 第二十三卷第二號 目錄

○原 著

○火傷菌ノ學名

第四高等學校教授 市 村 塘 一

○猫咬症ノ一例

田中 一 次 郎 五

○興味アル「ヂフテリ」後麻痺

金澤醫學士 宮本實太郎 三

○實 驗

○マーデルング氏杵穿傷例

ドクトル 飯森益太郎 一七

○纂 說

○耳鼻咽喉科小史(其四) 越村甚次郎 一八

○抄 錄

内科、小兒科學及神經科學 五 件 三

醫 化 學 三 件 三

病 理 學 四 件 三

外科學及皮膚泌尿器科學 六 件 三

眼科學及婦人科學 三 件 三

○漫 錄

●眼病ト食養生。ドクトル 辻 本 辰之助 四

○雜 報

●金澤市醫師會議員會。●保健衛生調査官増員。●伏木港檢疫所設置。●官立醫學專門學校規程改正。●第四十七回金澤病院醫事集談會 四

○校內消息

●新年拜賀式。●本校規則中改正。●石坂教授教紀念品 四

○會 報

●十全會大阪支部會記事。 四

○叙任及辭令

●賞勳局。●内閣。●宮内省。●内務省。●石川縣。●金澤醫學專門學校。 四

○人 事

●池上豐氏。●眞下信一郎氏。●矢吹清氏。●内海元一郎氏。●青山太郎氏。●谷澤碩氏。●本田盛正。●中橋賢造。●野澤寛二氏。●林戸正之介氏。●駒形重光氏。 四

○會 告

●校外特別會員會費納付調書。 四

抄 録

内科、小兒科學及
神經科學

○「チアノクプロール」ニ關スル研究

(傳染病研究所學友會雜誌第一號)

學博士 芳 我 石 雄
渡 邊 富 藏

著者等ハ從來ノ行ヘル「チアノクプロール」研究ヲ概括シ、該劑ノ論評ヲ試ミタリ。即著者等ハ古賀博士ノ該劑ニ關スル第一回報告ニヨリ、一、 KON_2 、二、 K_2ON 、三、 $\text{KCu}_2\text{ON}_2 + \text{H}_2\text{O}$ (以上ハ結晶トシテ) 四、 K_2ON 、(溶液トシテ)ノ四種ヲ製出シ、此等ノ藥劑ニツキ研索ノ結果古賀液・菅井液ハ著者等ノ青化銅カリウムI、 KON_2 ニ相當スルモノトシ、「チアノクプロール」ノ結核ニ對スル作用ハ「バラヂトローブ」ニモアラズ又「オルガノトローブ」ニモ非ザル可シト述べ、結核ニハ効果アリトハ認めズトナセリ。

次デ著者等ハ古賀博士ガ後ニ發表セル「チアノクプロール」組成(即青酸銅青酸ナトリウム醋鹽— ON_2NaON ト $\text{ON}_2\text{ON}_2\text{NaON}$ トノ混合物—ヲ五百倍ノ水溶液トナシ、之ニ一%ノ割ニ鹽化カルシウム)ヲ加ヘ炭酸瓦斯ヲ以テ飽和セリト云フ)ニ基ツキ、古賀液、鹽化カルシウム液ヲ結核接種動物ニ應用シタルニ試驗動物ハ對照動物ニ比シ生存日數稍長キモツハ偶然ナルベシトナシ、古賀液ノ無効ナルヲ説キ、從テ之ヲ以テ眞ノ意味ニ於ケル化學的療法ニ用フル能ハズト述べ、且ツ臨床上(六名ニ應用)屢々咯血、病勢増悪等ヲ伴フ事アルベシトテ其ノ使用ニ反對セリ。

(內科學教室橋本抄)

○百日咳凝集素ノ產生部位並ニ

局處免疫ニ就テ

(兒科雜誌第二百十一號)

京都醫科大學小兒科教室
醫學士 高 木 義 敬

著者ハ「チブス」猩紅熱、麻疹乃至百日咳ノ如キ傳染性疾患ガ如何ナル原因ニヨリテ起リ如何ニシテ免疫性ヲ遺スカテフ疑問ハ諸學者ノ最モ興味ヲ惹キシ問題ニシテ病原體ノ發見ハヤガテ其抗體ノ研究ヲ促シ抗體ノ研究ハ更ニ

該抗體ガ如何ナル部位ヨリ産出セラルルカノ問題ヲ提供スルニ至レリ氏ハ主ニ家兔ニ付キ百日咳凝集素ノ産出部位並ニ局處免疫ニ就テ研究シ左ノ結論ヲ得タリ。

一、家兔ニ百日咳菌ヲ種々ノ方法ヲ以テ注射シタルニ免疫初期ニ於テハ一般ニ脾臟抽出液ノ凝集價ハ血清ニ比シ高價ナルカ、或ハ同價ナルコト多シ。

二、脾臟ノ剔出ハ常ニ凝集素ノ産生ヲ障碍ス。

三、上述ノ事實ニ據リ百日咳凝集素ハ脾臟ニ於テ産生セラルルモノナラムト信ズ。

四、骨髓抽出液ノ凝集價モ免疫初期ニ於テ往々血液或ハ血清ニ於ケルト同等ニ達スルコトアリ。之ニ據リ百日咳凝集素ノ骨髓ニ於テモ亦産生セラルルモノナラムト思考ス。

五、淋巴腺抽出液ノ凝集反應ハ常ニ明確ヲ缺クヲ以テ凝集素産生ヲ營ムヤ否ヤ積極的ニ判定スルコト困難ナリ。少クトモ免疫初期ニ於テハ假令(産出ストモ顯著ナラザルガ如シ。免疫注射後時日ヲ經タルモノニアリテハ往々稍々著シキ凝集反應ヲ見タリ。

六、「ベンツオール」ヲ以テ處置セル動物ニ於テハ凝集素ノ産生ハ一般ニ障碍セラル。是レ造血臟器ノ侵サルルタメナラム。

七、レントゲン線放射ヲ受ケタル動物ニ於テモ、百日咳凝集素ノ産生ハ多少影響ヲ蒙ルモノノ如シ。是亦造血臟器ノ侵サルルタメナラム。

八、免疫原注射後時日ヲ經過スレバ、血清(又ハ血液)ノ凝集價ハ漸次上昇シ、反之脾臟及骨髓抽出液ノ夫ハ下降ス。此關係ハ免疫現象ノ迅速ニ行ハルル靜脈内或ハ腹腔内注射ニ於テ早期ニ現ハル。而シテ皮下注射ニ於テハ少シク後期ニアラハル。

九、白血球抽出液ニ於テハ通常凝集反應陰性ナリ。

十、凝集素ノ血管系統内ニ於テ産出セラルルヤ、否ヤハ不明ニ屬ス。尙ホ如何ナル細胞ヨリ分泌セラルルヤ、否ヤヲ定ムルコト能ハザリキ。

十一、其他ノ諸臟器ニ於テハ免疫初期ニ於テ凝集素ヲ證明セズ。肝臟抽出液ハ每常本試験、對照試験共ニ甚ダ凝集反應ニ疑ハシキ現象ヲ呈シ從テ凝集素産生機能ヲ有セルヤ否ヤヲ定ムルコト困難ナリ。

十二、腦骨髓液及前眼房水中ニハ高度ニ免疫セラレタル動物ニ於テノミ、凝集素ヲ證明ス。而シテ從來報告セラレ居ルヨリモ比較的少量ナル場合多シ。膽汁中ニハ通常百日咳凝集素ヲ證明セズ。

十三、凝集反應ニ關シテハ、皮下、腹腔内或ハ前眼房内

注射ニヨリテハ、局處免疫ノ成立ヲ證明スルコト能ハズ。

十四、腦腔内注射(犬)ニ於テハ、往々腦脊髓液ノ凝集素ハ血清ノ夫レニ比シテ優ル。是レ腦腔内局處免疫ノ存スル爲ナルベシ。
(小兒科教室稿抄)

○中樞神經系統ヘノ癌腫ノ轉移

(The Journal of Nervous and Mental Disease, June, 1917.)

イザークレーヴィン

腦ヘ肉腫癌腫ノ轉移スルコトハ比較的稀ニシテ其ノ%數人ニヨリ多少異ナルモ全癌腫例ノ半數以上他臟器ニ轉移スルヲ思ヘバ甚ダ少シ、クラステンング及シルワンハ腦右側ヨリモ左側ニ多キヲ見出セシモオッフアゼルトハ之ヲ否定セリ。轉移ノ特徴ハ原發腫瘍ノ部位ニヨリ頻度ノ異ナルコトナリ即チク氏ノ例ニ於テ攝護腺癌ヨリ轉移セシモノ二二・二%乳腺癌ヨリノモノ一八・八%子宮癌ヨリノモノ三・四%ナリ、之レ癌細胞ノ一定局所ニ達スルコトノ難易ニヨルトハ病理學家間ノ輿論ナリ。クルワイルヒールハ中樞神經系ハ癌發育ニ對シ他臟器ヨリ大ナル抵抗ヲ有スト、オ・フィシャーハ灰白質ハ白質ヨリ轉移形成ニ對シ大ナル抵抗ヲ有スト述ベタリ。次デ著者ハ鷄ノ腹壁ヲ開キ

肝胃内ニ肉腫ヲ移植シ對稱鷄ニハ右胸筋ニ移植シ其ノ結果ヲ報告セリ。肝胃移植試驗ニ於テ平均生存日數ハ對稱動物ヨリ短ク腦ニ轉移ナク其他轉移ノ頻度部位ニ大ナル差異ナシ只胃試驗時ハ肝試驗時ヨリモ腹膜腔ヘノ撒種多ク且ツ廣汎ナリキ(四表)。腦移植試驗、套管針ヲ以テ左半球ノ頭蓋ニ孔ヲ開ケ針ヲ腦内ニ挿入シ術後創孔ハ蠟ニテ封シ皮膚ハ絹糸ニテ縫合セリ、第一類(二表)平均生存日數一一日腫瘍ノ大サハ他部ニ移植シ同日數ヲ經タルモノヨリ小ナリ、轉移形成ナシ、第二類(二表)平均生存日數八、四日轉移形成ナシ生存日數ノ短キハ季節ノ温熱ニヨル可シ(八月施行)腫瘍ノ大サ關係ハ一類ト等シ、第三類平均生存日數一二・五日轉移形成ナシ其他第一類ト等シ。著者ハ以上ノ實驗ニヨリ生存日數ハ胸筋内移植肝胃内移植腦内移植ノ順ニ短縮スルヲ知リ腦ニ於ケル肉腫ノ小ニシテ且ツ轉移ナキハ腦組織ガ腫瘍ノ成長ニ一定ノ影響ヲ與フルトノ想像ヲ以テ説明セリ。更ニ腦腫瘍ヲ胸筋ニ移シ之ヨリ再ビ胸筋ニ移シ而シテ發育遅徐ナリシ腦腫瘍ハ發育力ヲ恢復シ轉移ノ頻度ヲ増スニ至リシヲ見タリ(二表)之ニヨリ鷄肉腫ハ腦内移植ニヨリソノ増殖轉移形成力ヲ人工的ニ減ジ得ト云フ結論ニ到達セリ。次ニ臨床症例ヲ記述セリ。一例四一歳婦人直腸癌發病後一ケ年ニ

シテ頭痛ヲ訴フ、次デ腱反射亢進眼球ノ症狀ヲ現シテ死亡。病理解剖診斷、直腸周圍及子宮ニ蔓延セル再發直腸癌。腹膜後及頸部淋巴腺、甲状腺、肺、腦膜及腦内轉移、急性膀胱炎、腎盂腎炎、氣管、淋巴腺ニ於ケル古結核竈、中度ノ氣腫等。右前頭葉ニ二個小腦各半球ニ二個宛ノ腫瘍結節ヲ見タリ。二例四五歳婦人左乳癌發病後二年ニシテ言語不明トナリ次デ意識消失シ死亡。檢屍不能。臨床診斷、骨轉移左眼轉移、腦轉移。三例四二歳婦人右乳癌根治手術後六ヶ月ニシテ頭痛眩暈右半身不隨ヲ來シ死亡。檢屍不能而シ腦ニ轉移シテ死セシコト明ナリ。以上ノ例ニヨレバ腦内轉移ハ比較的遲シ之等ヨリ腦ハ他臟器ヨリモ癌侵蝕ニ對シ抵抗大ナリト結論セラル可シ。神經ノ侵ルルコト腦ヨリ更ニ稀ナリ。腦膜、脊髓内轉移ハ比較的多少ト言フモコトハ腫瘍ノ脊柱ヲ侵シ神經ヲ壓迫シテ起ル症ヲモ本症ニ合算セシニヨル。(以下三例省略只第六例ニ於テX線奏効セリ)。

之ヲ要スルニ轉移形成研究ハ腫瘍増殖ト局所トノ間ニ於ケル相互關係ヲ鮮明スルニアリ。轉移ノ比較的稀ナルコトハ早期診斷ヲ誤ラシムル大ナル理由ナリ。其他診斷ヲ誤ラシムルモノニアリ一ハ神經中樞系ニ轉移スルモ全經過中症狀ヲ現スモノアリ又一ハ一程期間症狀ヲ現サズシテ臨終ニ現スモノアリ、一ハ原發腫瘍ト中樞狀態トヲ比較ス

ルハ無意義ナルラシト言フ事アルニヨル。從ツテ治療法誤ラル、結腸ノ癌腫ニテ腦症ヲ現シタルモノニ「ガッセリ」節ヲ剔出セリ而シテ死後始メテ癌ノ腦内轉移ナリシコトヲ知り得タル例アリ。脊髓内轉移ニ於テ原發腫瘍ノ注意セラレザルコト多ク「バラプレギア」ハ原發病ニシテ外傷ニヨリテ起リシト考ヘラルルコトアリ。最後ニ著者ハ癌腫ハ結核微毒ノ如ク容易ニ腦ニ轉移シ得ルコトヲ忘ル可カラズト述ベタリ。

○脊椎癌腫—甲状腺ヨリノ轉移ニ

ヨル馬尾疾患ノ一例

(The Journal of Nervous and Mental Disease, July, 1917.)

ア・スクワースキ

著者ハ脊椎癌ノ比率、甲状腺腫瘍ニ關聯セル文獻ヲ詳述シ甲状腺癌腫ニシテ後腰椎ニ轉移シ馬尾壓迫ニ歸ス可キ症狀ヲ結果セシ一例ヲ報告シ左ノ結論ニ到達セリ。

脊椎癌ハ吾々ノ信ズルヨリモ多キモノニシテポット氏病其ノ他ノ脊椎炎ト比スレバソノ認メラルルコト少シ。

脊椎並ニ其他ノ骨組織ノ癌腫ハ決シテ原發性ニ非ズシテ常ニ轉移性ナリ臨床上見逃サルルモ死後注意シテ檢セバ常ニ原發部位ヲ得ラル可シ、甲状腺癌腫ハ一般ニ發育小

ニシテ臨床上見逃サル可ク而シテ轉移ガ病症ノ重キヲナス。

脊椎癌ノ症候ハ多様ニシテ不定ナリ且ツ解剖的次序ニ從ハズ、局所症ナキ特發骨痛ハ普通最初ノ出現ナリ最モ重要ニテ且ツ屢ナルハ知覺根症狀ニシテマタ最モ特徵トスル所ナリ、成人ニ於テ普通ノ治療ニ反應セザル永キ坐骨神經痛就中兩側ニ來ルモノハ常ニ腰椎疾病ヲ想像ス可シ、クルワイルヒール及シヤルコーノ所謂 Paralyse douloureuse ハ

脊椎癌ニ由來スルト思ハル。脊椎癌ハ一般ニ數年間潜伏ス經過ノ多様ニテ永キ爲メ「リウマチス」腰痛坐骨神經痛神經炎官能性疾病ト想像セラレ屢治癒セリト考ヘラレ、時ニ輕度ノ外傷ガ椎體ノ急速ナル破壞ヲ促スコトアリ。神經或馬尾症狀ハ一般ニ甚ダ急ニ現レ速ニ不幸ノ結果ヲ導クモノナリ。

「レントゲン」ハ脊椎癌ノ早期診斷ニハ實體上ノ補助トナルコト少シ是ハ骨瘤腫ハ肉腫内軟骨腫等ノ如キ原發性増殖ト反對ニ骨侵蝕ナルニヨル可シ而シテ後者等ハ骨増殖ニシテX線ハ一定ノ陰影ヲ映ズ。

接近セル神經組織ノ罹患程度ハ常ニ臨床上ニ於ケル疾病範圍ト並行セズ。脊椎神經ハ實地上決シテ癌侵蝕ノ部位ニ非ラズ。死後原因トナル可キ脊椎増殖ノ直接壓迫ヲ見

ズシテ廣汎ナル神經變質アルコトアリコノ際ニハ神經中毒問題ガ考ヘラル。

本例ノ研究ハ脊椎癌ノ經過ハ其ノ他ノ病症ノ内最モ危險ナルモノノ一ニシテ且ツ輕減セラレX線療法ニヨリ制セラレ得ルガ故ニ本症ノヨリ多キコト及早期診斷ニ對スル評論ナリ。
(以上二件、神經科教室廣橋抄)

○再ビ癲癇ニ於ケル「アムモン」

角硬化症ノ意義ニ就テ

(神經學雜誌第十六卷第十二號)

醫學士 下 田 光 造

著者ハ先ニ東北醫學雜誌ニ於テ所謂「アムモン」角硬化症ナルモノハ眞性癲癇ニ於ケル特殊ノ變化ニ非ザルヲ述ベタルガ再ビ高度ノ精神薄弱ト癲癇發作トヲ有セシ三十二方ノ男子ニシテ所謂癲癇性白癡ニ一致セル患者ニツキ臨床的並ニ解剖的所見ニヨリ氏ノ持論ノ確實ナルコトヲ述ベタルガ該例ハ身体的ニ頭蓋發育不良顔面左右不均皮膚反射ノ異常ヲ有シ特異ナル痙攣發作朦朧狀態癲癇性人格(不機嫌強情癡盜癖)アリ其ノ他精神的發育甚ダ不良ニシテ注意ハ散亂シ領會ハ不良智力ハ劣等ニシテ治療中急性脚氣ニヨリ死セルガ剖檢上肉眼的ニハ左顱頂葉ノ上部

及右側後正中回轉ノ上部ニハ回轉著シク迂曲縮少陷凹シ其ノ部腦溝開大シ軟腦膜肥厚シ白濁アリ尙ホ右側「アムモン」角ハ左側ニ比シテ萎縮シ白輝アリ組織學上ニハ瀾蔓性癲癇性變化ノ他ニ此ノ限局性萎縮部ハ勿論右側「アムモン」角及肉眼上異常ヲ發見セザリシ大腦各部ニ散點シテ軟膜ノ著シキ纖維性肥厚膠質線層ノ不平等ナル肥厚第一層ハ狹少ニシテ萎縮セル膠質細胞及血管ニ富ミ時ニ所謂カハール氏水平細胞ヲ有シ外顆粒層ハ粗ニシテ處々竈狀ニ缺損シ第三層ノ大ナル錐體細胞ノ表面ニ露出セル部分アリ尙ホ該細胞ノ萎縮及其ノ方向亂雜及密度ノ不定等ヲ認メシモ神經纖維ノ限局性消失ヲ見ザル等ノ事實並ニ臨床上ノ知見ヲ綜合スレバ本例ノ疾病ノ根柢ハ極メテ幼少ノ時期若シクハ胎生時期ノ末期ニ於テ嘗テ行ハレタル腦膜腦質破壞病機ナリト推斷スルヲ得ベク而シテ此際見ラレタル右「アムモン」角硬化ハ其組織的所見上前記破壞機轉ノ一部ニ過ギザルヲ述ベ即チ「アムモン」角硬化症ナルモノガ從來信ゼラレタルガ如ク所謂真正癲癇ノ一表徵ニハアラスシテ寧ロ却テ器質的癲癇ノ一表徵ナリトナセリ。

(神經科教室中谷抄)

醫 化 學

○可及的「チュロジン」ヲ除去シタル

食餌ヲ以テセル飼養試驗

(The Biochemical Journal Vol. IX No. 3, Sept. 1915.)

戸 谷 銀 三 郎

「チュロジン」ガ動物營養上如何ノ關係ヲ有スルカラ檢セシガ爲メ、著者ハ可及的「チュロジン」ヲ脱却シタル食餌ヲ以テ動物ヲ飼養シ、次ノ結果ヲ得タリ。

一、「カゼイノゲン」ノ加水分解産物ヨリ「チュロジン」ヲ定量的ニ分離シ能ハザリキ。

二、極メテ少量ノ「チュロジン」ヲ夾雜セル「アミノ酸混成體」ハ充分ナル養價ヲ有シ、多量ノ「チュロジン」ヲ含ムモノト何等擇ブ所ナシ。

三、之ヲ鼠ニ就キテ行ヘル實驗ニ徴スルニ、何等前處理ヲ施サザル「ゲラチン」ハ吸収サレ難キモ、豫メ之ヲ加水分解スレバ著シク共養價ヲ増進ス。

四、加水分解セラレタル「ゲラチン」ニ、「ゲラチン」ヨリ發生シ得ベキ「アミノ酸」以外ノ二三ノ「アミノ酸」ヲ賦加スレバ、完全ニ蛋白質ヲ代償スルヲ得。

五、純ゲラチン」ノ加水分解産物ニ單ニトリ「プトファール」ノミヲ追加スルモ、尙ホ能ク動物ノ營養ヲ維持スルヲ得。
(醫化學教室竹内抄)

○「チュロジン」及「ヒスチゲン」ノ

「デアツォ」反應ニ就キテ

(The Biochemical Journal Vol. IX No. 3, Sept. 1915.)

戸谷 銀三郎

著者ハ「チュロジン」及「ヒスチゲン」ノ「デアツォ」反應ニ就キテ研究シ、左ノ結論ニ到達セリ。

一、同一色調ヲ有スル「チュロジン」及「ヒスチゲン」ノ「デアツォ」化合物ノ水溶液ヲ水素(鹽酸加亞鉛末)ヲ以テ還元シ、尋デ過剰ノ「アンモニア」水ヲ加フレバ、「チュロジン」ハ紅色ヲ「ヒスチゲン」ハ黃金色ヲ呈ス。而シテ此色調ノ差異ニヨリ兩者ヲ鑑別スルヲ得。

二、前記ノ試験法ニ依リテ發現シタル黃金色ハ「ヒスチゲン」ナル蛋白質ノ加水分解産物ニ特有ナリ。此「デアツォ」反應ハ十萬倍ノ「ヒスチゲン」溶液ニ於テ現ハルルモ而カモ「ヒスチゲン」ニ特有ナル黃金色ヲ發現セシムルニハ約二萬倍ノ溶液ヲ要ス。

三、「チュロジン」及「ヒスチゲン」ノ混合物ニ就キ「デア

ツォ」反應ヲ行フニ當リ、若シ薔薇紅色ヲ呈スルコトアラバ、之正ニ「チュロジン」ノ存在ヲ證スルニ足ル。尤モ「デアツォ」反應ニヨリテ發現スル薔薇紅色ハ「チュロジン」ニ特有ナラズ。此改良チュロジン反應ハ概ネ一萬倍ノ溶液ニ依リテ發現シ、被檢溶液ガ多量ノ鹽化物ヲ含有スルトキハ「ミロン」反應ニ比シテ一層鋭敏ナリ。

四、チュロジン又ハ他ノ「アミノ酸」ノ第二次デアツォ反應ニ依リテ發現スル紅色物質ハ過酸化水素ニ逢フテ褪色シ、無色又ハ淡鏽色ニ變ズ。然レドモ「ヒスチゲン」ニ由來スル黃金色物質ハ、過酸化水素ノ作用ヲ蒙ルコト尠シ、即僅カニ「レモン」黃色ヲ呈スルニ過ギズ。

五、少量ノ「デアツォ」ベンツォールスルフォン酸ヲ「ヒスチゲン」ニ結合セシムルカ、又ハ還元法ニ兼ヌルニ酸化法(過酸化水素)ヲ以テスレバ、容易ニ蛋白質タル「ヒスチゲン」ヲ證明スルコトヲ得。蓋シ第二次デアツォ反應ニ際シ發現スル色調ハ該アミノ酸ニ特有ナレバナリ。
(醫化學教室竹内抄)

○子 痲ノ 本 態

(日新醫學第七年第四號)

醫學博士 小畑 惟 清

著者ハ胎盤ヲ以テ一ノ臟器ト見做シ、ドルト氏ガ唱ヘタル各臟器ノ食鹽浸出液ガ有スル毒性ハ、血清ニヨリテ中和セラルルテウ臟器毒説ヲ根據トシ、子癇ノ本態ヲ研鑿シ、次ノ結果ヲ得タリ。

一、一定量ノ人胎盤浸出液ヲ南京鼠ニ注射スレバ、常ニ呼吸困難ヲ起シ、加之其大多數ニ於テ痙攣ヲ發シ、其症狀恰モ子癇ノソレニ彷彿タリ。

二、七乃至一五瓦ノ体重ヲ有スル南京鼠ニ對スル健康人胎盤浸出液ノ致死量ハ〇・〇二五乃至〇・一五瓦ニシテ、同一方法ニ依リテ得タル子癇胎盤浸出液ノ致死量ハ〇・〇一九乃至〇・一瓦ナリ。即健康胎盤及子癇胎盤ノ毒性ニハ著シキ差異ナシ。

三、同種動物ニツキ健康人血清ト子癇血清ノ毒性ヲ比較シタルニ、健康男子、非妊婦、妊婦、産褥婦ノ血清ノ致死量ハ〇・二乃至〇・四瓦ニシテ、子癇血清ノ致死量ハ〇・二或ハ〇・三瓦ナリ。即知ル子癇血清ノ毒性ハ健康人血清ノ夫ト甚シキ差異ナキコトヲ。且ツ之ヲ子癇患者各自ニツキテ觀ルニ、血清ノ毒性ハ罹患期ト恢復後トニ於テ大差ナシ。

四、子癇血清ノ胎盤毒ニ對スル解毒能力ハ健康人ノ血清ノ夫レニ比スレバ著シク小ナリ。即一〇瓦ノ胎盤浸出

液ノ毒素ヲ中和スルニハ僅カニ〇・二乃至〇・三瓦ノ健康人ノ血清ヲ要スルニ過ギザレドモ、若シ子癇患者ノ血清ヲ以テセント欲セバ、〇・六瓦ヲ用キザルベカラズ。而シテ此解毒作用ハ子癇症狀ノ減退ニ伴フテ上昇シ、産褥第四日或ハ第五日ニ至レバ既ニ健態ニ復ス。是正ニ從來學者ノ報告中未ダ嘗テ見ザル所ナリ。

五、血清ノ解毒能力ヲ檢定シタル健康家兔ニ胎盤浸出液ヲ注射シテ痙攣ヲ起サシメ、更ニ同一動物ニツキテ其血清ノ解毒能力ヲ再檢シタルニ、健康獸ノ夫レト何等擇ブ所ナシ。即子癇ニ於ケル血清ノ解毒作用ノ減弱ハ痙攣ニ基因セズ。

六、胎盤毒ヲ以テ家兔ヲ免疫スルコトヲ得ズ。

七、胎盤毒ニ因スル中毒症狀ハ子癇ノ發作症狀ニ類似ス。而シテ胎盤毒ノ連續的注射ニ依リテ中毒セシメタル動物ニ就キテ行ヒタル試験、並ニ中毒屍ノ解剖所見ニヨレバ、血液凝固性ノ亢進、内臓ノ出血及變性、其他血栓成生ノ諸點ニ於テ概ネ子癇ノ夫レト相一致ス。著者ハ以上ノ結果ヲ綜合シ、母体血清ノ解毒能力減退セル状態ニ於ケル胎盤毒ノ中毒症狀ヲ以テ子癇ノ本態ナリト結論セリ。

(醫化學教室竹内抄)

病 理 學

○血栓ノ成因ニ關スル知見補遺

(東京醫學會雜誌第三十一卷第十一號)

東京醫科大學病理學教室

醫學士 竹 内 節

血小板凝集ヨリ成立スル所謂白色血栓ガ血栓形成ノ初發部タルコトノ知ラレテ以來、アシヨッフニヨリテ樹立セラレタルウィルヒョウノ古説血流變化血栓成因説ハ理論的根據アリ、同時ニ實地臨床乃至剖檢統計的證明アリ。一時相對立セシ傳染成因説ハ遂ニ立證サルニ至ラズ近時ニ至ル迄最モ重キヲナセルハ血流變化説ノミナリキ。乍然、最近デイトリッヒ、草間、八代氏ノ實驗ニ依レバ機械的成因説ハ單ニ純理論的推定タルカノ觀ヲ呈スルニ至レリ。一方臨床乃至剖檢的事實ハ機械的關係ノ尙ホ排除ス可ラザルヲ證明ス。著者ハ此實驗的研究及ビ自然血栓研究間ニ存スル不一致ノ理由ニ歸着ス可キカヲ知ラントシ、豫テ自然血栓組織の研索及本教室既往十有五年間ニ亘レル剖檢の所見ニ基ケル統計的觀察ヲ参照シ實驗的研索ニ從事セリ。著者ハ家兔ヲ用キテ實驗的ニ同個体ヨリ剥出セル子宮、小腸或ハ胃壁ヨリ浸出液ヲ作製シテ

同体靜脈内ニ注入シ、又「コルラルゴール液或ハ」エーテル溶液ヲ對照併用シ心臟及肺臟内ニ血栓ヲ形成セシメ仔細ニ之ヲ觀察シ次ノ如キ結論ヲ得タリ。

一、血栓形成最始ノ要約ハ血小板凝集ニシテ原因ハ血液性狀ノ變化ニ在リ。癌腫妊娠ガ統計的ニ血栓形成ヲ誘起スルノ理由ハ其破壞組織ノ血管内輸送或ハ溶解吸收ニ由ル血液性狀變化ニ歸因ス可シ。

二、臟器組織浸出液靜脈内注射ハ血小板ノ凝集ヲ催進スルノ外著シキ白血球増加ヲ誘起ス、但シ斯カル白血球ノ増加及其破壞ハ單獨ニ普通血流中ニ於テ血栓形成ヲ催起スルコト能ハズ。

三、血小板及白血球ヨリ成ル初發血栓ハ時日ヲ經ルニ從ヒ漸次消散スルヲ常トス。但シ又永續的器質化血栓ノ形成ヲモ證セリ。其他強力毒素ニヨリ比較的緊密ナル結合ヲ有スル血栓形成セラルルヲ見ル、弱力毒素ノ間歇的の反復ニヨリテハ血栓形成容易ナラズ。但シ弱力毒素モ血流内混和ニ平等ノ爲メニ部分的強作用ヲ發揮スルヲ得ベシ。

四、肝細胞變性ガ血栓形成ヲ誘起スルコト統計上知ラレシト共ニ亦實驗的ニ證明セラレタリ。之レ肝細胞ノ血栓形成防止作用ニ歸因シ其作用ハ血栓誘發物質ノ肝血

管内通過ニ際シ著シ。

五、統計上一般ニ婦人(特ニ中年期)ニ頻發シ兩性共ニ幼年者ニ少ク老齡ニ多キ傾向アリ。

六、靜脈内ニ於テハ其併走動脈内ニ於ケルヨリモ血栓形成容易ナルコト統計上並ニ實驗上ニ證明セラル。

七、初發白色血栓ノ固定シ永續血栓化スルニ當ル可染色纖維素ノ析出スト言フ能ハズ。

○組織内ニ於ケル結核菌檢出ニ

關スル一便法

(醫事新聞第九百七十三號)

醫學士 渡邊 富藏

從來行ハルル組織内結核菌檢出法ハ可ナリ煩ハシキ處置ヲ要シ臨床上不便尠カラズ而モ必ズシモ確實ナル結果ヲ得ル能ハズトシ可成的短時日ニ且ツ確實ニ知ラントスル目的ニテ一便法ヲ得タリ。即チ「フォルマリン」ヲ以テ固定セル組織片ヲ以テ凍結切片(或「パラフィン」、「チェロイダン」標本ニテモ可也)ヲ作製シ直チニ清淨ナル「オプエクト硝子」ニ貼布後室温ニテ十分乾燥セシメ之ヲ「チール」ネールゼン氏法ニヨリテ染色スルニアリ。之ニ依レバ卵器ヲ要セズ從テ時間ヲ節約シ同時ニ切片ノ紛亂萎縮ヲ

防ギ又切片上ニ「フクシン」ノ殘留沈澱ヲ來サシメズト。

(以上二件、病理學教室垂水抄)

○所謂胸腺腫(Thymoma)ニ就テ

(癩第十一年第三册)

東京醫科大學病理學教室

農學士 市川 厚一

著者ハ「マウス」ノ解剖ニ際シテ偶然ニ胸腺部ニ腫瘍ヲ發見シ從來報告セラレタル胸腺部ニ發生セル腫瘍ノ例ヲ集メテ著者ノ意見ヲ加ヘ左ノ如ク説フナセリ。

一、本例ハ「マウス」胸腺ニ原發セル胸腺皮質圓形細胞ニ由來セル腫瘍ナリ。

二、胸腺原發腫瘍診斷上(人類及ビ動物ニ於テモ)該腫瘍ノ位置的關係、其形狀及ビ造構ハ最重要ナル點ナリ殊ニ其他繼發、轉移等ヲ除外シ得ル場合ニハ生理的ニ近キ胸腺ノ殘存スル事モ亦確定的價值ヲ有ス。

三、ハッサル小体ノ胸腺原發腫瘍組織中ニ存在スル場合ハ人類例ニテモ甚ダ稀ナリ然ルニ其存在スル事ヲ以テ Rubaschow 等ハ其原發タル確定的價值ヲ有スト主張セルガ其ハ寧ロ一定ノ場合ニ於テノミ一條件タリ得ルノミナルベシ。

四、胸腺皮質圓形細胞ニ由來スル胸腺原發腫瘍ニハ從來或ハ圓形細胞肉腫或ハ胸腺惡性腫瘍或ハ胸腺腫等種々ナル名稱ヲ附與セラレタリ。是レ該皮質圓形細胞ノ本體ノ解決セラレザルニ歸因ス現在ノ知見ニ於テハ淋巴球性トモ上皮性トモ斷ジ難キヲ以テ是レヲ以テ圓形細胞肉腫乃至淋巴肉腫ト命名スルハ妥當ナラザルベシ。且ツ該細胞ニ由來スル腫瘍例ハ胸腺原發腫瘍例ノ過半ヲ占メ、尙ホ其ノ組織的所見モ胸腺皮質ト酷似シ殆ド區別シ得ザル造構ヲ呈スルヲ以テ此種腫瘍ヲ胸腺皮質圓形細胞腫或ハ皮質性胸腺腫 (Thymoma corticale) ト命名セント欲ス。

五、從來胸腺ニ胸腺皮質細胞腫ト認ムベキ腫瘍アリ同時ニ淋巴性乃至假性白血病ノ存在セル例アリト雖、本例ニ於テハ既ニ周圍殊ニ氣管枝周圍淋巴管乃至淋巴隙内ニ該腫瘍ノ侵入シアリシモ未ダ白血球過多症乃至假性白血病ト認ムベキ所見ナカリキ。

六、「マウス」胸腺二十三例ヲ連續切片トナシ組織的ニ檢索セリト雖未ダ人類胸腺ニ見ルガ如キハッサル小體ト認ムベキ者ニ接セズト。

○急性再發性眼瞼水腫フックス氏ノ

抄 錄

一例及び其組織學的知見補遺

(中央眼科醫報第十卷第八號)

東京醫科大學病理學教室

鹿兒島 茂

本病ハ身體中ソノ場所ヲ選バズト雖モ多クハ四肢殊ニソノ關節部ニ來ルモノナルモ著者ハ眼瞼部ニ來リシモノヲ報告セルモノナリ(本病ハ皮下組織又ハ粘膜ニ於テ急性ニ限局的ノ腫瘍ヲ發生シ忽然トシテ來リ又自然ニ消失シテ全ク痕跡ヲ止メザルヲ普通トスルモノナリト)著者ノ例ニ於テ其ノ組織的ノ處見ハ(發作ノ翌日眼瞼部ノ一部ヲ瞼緣ニ沿ヒテ切除シ檢査材料ニ供ス)上皮ハ一般ニ比較的菲薄トナリ乳頭亦淺小トナル眞皮ハ健康ナルモノニ比シ著シク薄シ皮下結締織ハ全般ニ非常ニ鬆粗ニシテ水腫狀ヲ呈シ其ノ間ニ存在スル毛細管並ニ小動脈及ビ靜脈共ニ擴張ス殊ニ靜脈ハ一般ニ著シク擴張シ淋巴管亦稍々擴張スルガ如シ、又各所ニ小出血竈ヲ見ル而シテ靜脈内膜炎ノ如キ變化ハ遂ニ見ル能ハザリキ。彈力纖維ハ各所ニ於テ多少ノ變化ヲ見ル即チ毛囊ノ周圍ニ於テハ非常ニ微細ナル顆粒狀短少ナル斷片トナル、恰モ又眞皮ニ於テ筋纖維ノ橫斷セラレタル周圍ニ於テ彈力纖維ハ相集束シテ一個ノ團塊ヲ形成セルヲ見ル同時ニ著

シク弛張セルモノヲ見ルトコロアリ斯ノ如キ變化ハ多クハ上皮ニ近ク接シテ存シ深部ニハ割合ニ少カリシト。

(以上二件、病理學教室松田抄)

外科學及皮膚泌尿器科學

○傳染シタル創傷ノ新療法

(東京醫事新誌第二〇四八號)

醫學士 松岡 銳 作

創傷治療上ニ消毒劑ヲ用フルガ如キハ、昔日ノ夢ナリトハ今日一般ニ唱ヘラルル所ニシテ、現今ハ全ク生理的療法ヲ行ハルルモ、現歐洲大戰ニ於テ多數ノ負傷者ノ創傷治療ニ當リ、カール、デキン、ロレーン、スミス等ハ種々ノ點ニ於テ、從來ノ消毒劑ニ勝ル所ノ消毒劑、即チ次亞格魯兒酸溶液ヲ用ヒ良好ナル効果ヲ得、次デ次亞格魯兒酸ノ中和溶液又ハ次亞格魯兒酸ナトリウム溶液ヲ推獎シ、近時該創傷療法ヲカール、デーキン法ト名ク而シテ最近該消毒劑ノ應用漸ク盛ナルニ至リ特殊ノ電氣器械ヲ用ヒ「ヒペルトーニッシ」ノ食鹽水ヨリ製出セリ、該消毒液ハ之ヲ瓶ニ容レ密封セバ比較的長時間其ノ効果ヲ保ツモ、ナルベク新鮮ナルモノヲ用フル方利益アル故コ

ノ電氣器械ヲ病院又ハ研究所ニ備ヘ、新鮮ナルモノヲ何時ニテモ必要量宛比較的廉價ニ製出スベシト。次亞格魯兒酸溶液ガ從來ノ消毒劑ニ勝ル點ハ、殺菌作用強力ニシテ石炭酸ヨリモ約百五十乃至二百倍ニシテ、シカモ組織ニ對シ損傷スルコト無ク其作用局所性ニシテ吸取セラルルモノ有毒ナラズ、且ツ創傷淋巴液ノ產出ヲ増加シ傳染セル創傷ノ表在性微菌ヲ殺滅シ、淋巴液ノ増加ニヨリ深部ノ微菌モ表層ニ流出サル。

ロレーン、スミス等ハ製出セル中和性ノ次亞格魯兒酸液ヲ「ユーゴール」ト名ケ、又瓦斯ノ形ニ於テ働シメ得ル粉末ヲ製出シ之レヲ「ユーバード」ト命名シ、諸實驗ニヨリ消毒力ノ勝レルヲ知り、次デ之レヲ切創、挫創、裂創等諸種ノ傳染シタル創傷ノ臨床的實驗ヲ施シ、其ノ觀察ヲ綜合スレバ次亞格魯兒酸ハ溶液ノ形ニ於テモ瓦斯ノ形ニ於テモ皆外科的實用上強度ノ消毒劑タル價値アリテ、殊ニ組織ニ吸取セラルルトモ危險無ク組織ニ對シテ損傷ヲ與フルコト少ク、「ヒペルトーニッシ」ノ作用ヲ併セテ有シ且ツ極メテ廉價ナル消毒劑タルハ最大ノ價値アル點ナリト。

(外科教室近藤抄)

○癩ノ療法

(臨牀月報第八十六號)

著者ハ癰ニ對シ切開療法ヨリモ寧ロ姑息的療法ノ勝レル
コト多キヲ推獎シ、其ノ理由トシテ曰ク、

一、單純ナル癰ハ自然ニ治癒スルコト多シ。

一、切開ニ由テ却テ病竈ヲ擴大シ治癒機轉ヲ妨グルコト
アリ。

一、切開ニ由テ稀ニ血行ヲ介シテ病毒遠隔セル部位ニ達
スルコトアリ。

一、切開ハ治療日數ヲ長カラシメ且患者ノ厭フ所ナリ。
姑息的療法ノ手段トシテハ主トシテ局處ノ安靜、ピツク
硬膏貼用、濕布帶等ヲ舉ゲタリ。

即チ此等ノ療法ニ由テ癰ガ屢吸取サレ、或ハ遂ニ其ノ頂
點ニ小膿點ヲ認ムルニ至ル、膿點ヲ認ムルニ至ラバ之ヲ
鑷子ニテ破潰シ内容ヲ壓出ス、此際吸角ヲ應用スレバ治
癒更ニ迅速ニシテ疼痛モ大ニ緩解ス、尙ホ周圍ニ硬結ノ
存スル間ハ濕布帶ヲ施スヲ妙トス。

然レドモ以上ノ姑息的療法ニ由ルモ消散セズ、或ハ周圍
ノ浸潤高度ニシテ疼痛劇甚ナルカ或ハ周圍ニ汎發性蜂窠
織炎乃至淋巴腺炎ヲ惹起シ熱發惡寒等アル際ハ、速カニ
十字切開ヲ加フベキモノナリト述ブ。(外科學教室高桑抄)

○ドナート、ランドスタイネル

反應ニ就テ

(臨牀醫學第五年第二十三號)

中 楯 幸 吉

發作性血色素尿ハ一八五四年トレスレル氏ノ始メテ記載
セシモノニシテ寒冷ニヨリテ「ヘモグロビン」或ハ其誘導
躰ガ尿中ニ排出スル獨立疾患ナリ然レドモ其ノ本態ニ至
リテハ血球崩壞ガ血管内或ハ血管外(脾、肝、腎、膀胱)ニ
起ルトノ二假說アレドモ今尙ホ確固タル定說ナシ而シテ
種々試驗ニヨリ血球崩壞ハ血管内ニ於テ行ハルル說一般
ニ信ゼラルル如シ其血管内血球崩壞ノ原因ニ二様ノ疑問
アリ即チ赤血球ノ抗力減弱ニ因スルカ將タ亦血清中ニ血
球崩壞物質ヲ生ズルニ因スルカナリ一九〇四年ドナート、
ランドスタイネル氏ハ血球溶解ハ血球ノ抗力ニ關係セズ
單ニ血清ニノミ因ルトノ事實ヲ實驗上ヨリ説明セリ然レ
ドモ今尙反對論者モアリテ本症ノ病因今尙確實ナラズ著
者ガ最近二例ニ就キドナート、ランドスタイネル反應及
自然發作時ト發作間歇時並ニ人工發作時ニ於テ患者血清
中ニ於ケル「アンボツェアトル」及「コンプレメント」ノ量
的關係ヲ檢査シ以テ血尿發作ノ機轉ヲ精密ニ知ラント企
テ次ノ如ク概說セリ即チ氏ハ各異レル時期ノ血清ニ就テ

「コズブレメント」及「アンボツエブトル」ノ量的關係ヲ検査シ是等ハ常ニ動搖シテ一定セズ就中發作間歇時ニ於テハ「コンブレメント」ノミ減少セルモ發作中ニアリテハ單ニ「コンブレメント」ノミナラズ、血清中ニ游離スル「アンボツエブトル」モ亦血球ト結合消費セラルルコトアリテ、爲ニドナート、ランドスタイネル反應検査ノ際例之バ多量ノ「コンブレメント」ヲ添加スルモ毫モ溶血現象ヲ起サザルコトアリ之ヲ以テドナート、ランドスタイネル反應ノ陰性ナル場合アルモ亦決シテ怪シムニ足ラズト。

(皮膚科教室森田抄)

○「ラヂウム」療法

(皮膚科及泌尿器科雜誌第十七卷第十二號)

安藤 二平
三木 信之

著者ハ八九密瓦白金筒入「ラヂウム」ニテ線ハ勿論線ノ大部分モ吸収サレオルガ如キモノニテ常人皮膚面ニ貼用スル時ハ大概三十六時間内外ニシテ約三週間後潰瘍ヲ生ズルヲ常トス、十密瓦方形鉦形「ラヂウム」ハ線モ多量ハ吸収サレズニ應用シ得テ之ガ健康皮膚ニ作用スルコト十分間ニシテ翌日微ニ潮紅シ二三日ヨリ潮紅去リ二週乃至三週目ニ再ビ著明ニ潮紅シ其後二ヶ月間ハ色素沈着ヲ認

ム、十五分間貼用部位ハ翌日ヨリ二三日微ニ潮紅シ二週三週目ニ潮紅著シク疼痛ヲ伴ヒ水泡形成ノ後ハ淺在性潰瘍ヲ作ルモ十日乃至二十日後ニハ治癒シ跡ニ白色ノ薄キ瘢痕ト色素沈着ヲ殘セリ百日後ノ今日尙多少色素沈着ヲ認ム、十五分以上貼用セル部位モ同様唯時間長キモノ程炎症強シ然シ反應鋭敏ノ度ハ人ニヨリテ多少異ルモノノ如ク甲ニ三十分間貼用シテ生ゼシ潰瘍ガ百日後ニ治癒セザルニ乙ニハ四十分貼用シテ生ゼシ潰瘍ガ三週間後ニ治癒セルアリ而シテ其後ニ毛細管擴張ヲ生ゼシモノアリ、著者ハ各種皮膚病ニ貼用シ特效ヲ納メン多クノ例ヲ示サレタリ殊ニ扁平表皮癌ニハ透過作用ノ強キ線ヲナル可ク長時間用フレバ必ズ治癒スルナラン乾癬毛囊性角化症ニハ濾過法ヲ用ヒズ短時間貼用スル時ハ治癒シ得ルガ如シ乳嘴腫尖圭コンヂュローム」ニハ濾過ナク少シク長時間使用スレバ治癒シ得ルガ如シ黃色腫ナドハ濾過法ヲ用ヒ長時間使用セバ治癒シ得ルト信ズ血管腫中殊ニ海綿様血管腫ニ特效アルガ如シ單純性血管性母斑殊ニ扁平淡紅色ノモノハ未ダ思ハシキ效ナシ然シ之モ濾過法ヲ用ヒ長時間使用セバ效アルモノノ如シ血管性母斑殊ニ海綿様ノ性質ヲ帶ビタルモノニハ卓效アリ色素性母斑ニハ思ハシキ效ナシ。

(皮膚科教室小出抄)

○急性膀胱炎ニ「オルトフォルム」

肝油ノ應用(總會演說)

(日本泌尿器病學會雜誌第六卷第四號)

石原 正 次

著者ハ急性膀胱炎ノ治療ニ際シ從來ノ一般方針タル攝生
法食餌法又ハ内服療法等ト共ニ阿久津博士ニヨリ案出セ
ラレタル「オルトフォルム肝油」ヲ膀胱内ニ注入シ良果ヲ
得タル十二例ヲ報告シ田中博士ノ一〇%「オイロフエン
肝油」ヲ急性膀胱炎ニ注入セルニ較ベ「オイロフエン肝油
ト同様に少量キ油劑ナルモ本劑ハ殺菌作用ヲ主トシ前者
ハ鎮痛ヲ主トスルニ於テ其目的ヲ異ニセリト云フ、然レ
ドモ「オルトフォルム肝油」モ卓越ナル鎮痛作用アリテ結
核性膀胱炎ニ對シテモ對症の良劑ナリ從ツテ膀胱ノ炎症
疾患ニテ尿意頻數疼痛甚シキモノニハ急性慢性ニ關セズ
對症の良果ヲ収メ得ルモノナリト、然シテ本劑ハ油劑ニ
テ「オルトフォルム」モ水ニ難溶性ナルガ故ニ膀胱内ニテ
尿ト混和セズ注入前ノ稠度ト同様に乳劑トシテ永ク存シ
膀胱粘膜炎ニ附着シテ包攝ノ作用アリテ皮膚疾患ノ軟膏油
劑ト同様に作用シ尿ノ刺激ヲ輕減シ尿トハ比重輕キニヨ
リ立位ニテ排尿シ油劑ノ尿道口ニ露ハルル時排尿ヲ中止
セバ油劑ノミヲ殘留セシメ斯クシテ一回注入セル油劑ハ

反復シテ新タニ注入セルモノト同様に作用シ得ベシ本劑
ハ乳劑ナルガ故ニ注入前ニハ必ズ充分振盪混和シ五%乃
至一〇%ノ「オルトフォルム肝油」ヲ五乃至一〇立方仙米
宛一日一回又ハ二回ギーオン氏「カテーテル」ヲ以テ膀胱
内ニ注入シ排尿ノ際膀胱内ニ油劑ヲ殘留セシムル様勉メ
シムベシ更ラニ本劑ノ副作用ニ關シ順天堂病院ニ於テ平
澤氏ハ膀胱結核ニ注入シ「オルトホルム」ガ粒トナリ結石
ヲ生ジタル一例ト熱發發疹ヲ來タセル一例トヲ報告セリ
此レニヨリ見レバ「オルトフォルム」ガ膀胱粘膜炎ヨリ服取
ナレ中毒症狀ヲ發起スルコト絶無トハ云ヒ難ク又乳劑ヨ
リ分離沈澱セル「オルトフォルム」ガ多少ノ害ヲ誘起スル
コトアルモ稀有ノ事實ニシテ著者ハ本劑ヲ多數ニ應用セ
ルモ未ダ一回モ斯ルコトナシト云フ。

○横痃治療藥「リムフォミン」ノ治療實驗

(日本泌尿器病學會雜誌第六卷第四號)

大坂府立難波病院

中野 生 清
武 富 秀 久

著者等ハ石原氏ガ大正六年四月三日第十七回日本皮膚科
學會ニテ氏ノ創製セル「リムフォミン」ガ「メチーレン青

ト「フェノール」ノ或ル誘導体ノ一新化合物ノ五百倍液ニテ結核性、淋毒性及ビ軟性下疳腺腫ニ効アリテ殊ニ淋毒性及ビ軟性下疳性横痃ノ凡テノ時期ニ特効アリト云フニ對シ本劑應用ノ十三例ヲ得テ其成績ヲ見ルニ一度急性炎症消散シテ腺ノ腫大アリ多少潮紅疼痛アル場合ニ効アルモノノ如シ特ニ潮紅疼痛共ニ殆ド消散シ單ニ腺腫大ト多少ノ鈍痛ト伴フ場合ニ奏効ス又本液ハ横痃ノ各期ニ用キモ一旦化膿ニ傾ケルモノハ全然之ヲ防止シ停止スルコトヲ得ズ一旦化膿セルモノハ小切開ニヨリ必ず完全ナル排膿ヲ要シ排膿不完全ナルカ深部ニ化膿存スレバ注射無効ナリト、一般ニ注射ト同時ニ温濕布ヲ施スカ硬結腫脹ノミノ場合ハ純イヒチオール」塗布ノ併用ハ効アルモノナリ又横痃發生ノ初期ヨリ注射スルモ到底病勢頓挫ノ効ナシ況ンヤ從來ノ療法ヲ廢シテ此ニ代フルコト能ハザルモ一療法トシテ治療ヲ助ケル價值アルモノナリ。

本劑ニヨル其治療ハ絶對的ニ非ズシテ再發シ得ルガ如ク用量少量ナレバ副作用ナキモ中ニハ著シキ特異質様症狀ヲ呈スルコトアルト使用ニ際シ用量少キ爲メ一時ニ數箇所ニ注射スルコトヲ得ザル不便アリ。

(以上二件、皮膚科教室田中抄)

眼科學及婦人科學

○眼科ニ於ケル「デアテルミー」ニ就テ

(中央眼科醫報第九卷第十二號)

山田邦彦

「デアテルミー」ハ高閃電流ニ依リテ生ズル高熱ヲ利用シテ體軀ノ一部ヲ温熱スルヲ以テ目的トス、高閃電流ガ組織ヲ通過スルヤ一定ノ抵抗ヲ惹起シ之ニ依リテ其「エネルギー」ヲ熱ニ變換スル物トス、一汎ニ應用セララルル平流又ハ感傳電氣ノ電力ヲ動物體ニ通ズルトキハ運動系及ビ知覺系ニ大ナル障礙ヲ與フルト雖モ、高閃電流ニ於テハ(其交流數一秒時一百萬ニ及ブ)生體組織ニ何等刺戟ヲ與フル事ナク單ニ熱の現象ヲ惹起スルニ止マル物トス。而シテ本法ハ一九〇八年以來其一般臨床的價值ヲ認めラレ後數年ニシテ多數ノ良好成績報告ヲ見タリ。

吾眼科領域ニ初メテ「デアテルミー」ヲ紹介シ動物試驗ヲナセルハシユライヒ氏ニシテ、其後一九二二年チユビングル眼科教室ヨリ本法ニ關スル業績發表セラレタリ、即チ健眼ニ五十五度ノ温卷法ヲ施ストキハ結膜囊ハ四十一度ヲ示シ硝子體及眼窩ハ三十七度五分ヲ示ス、「デアテルミー」ヲ用キシ場合ニ於テハ硝子體及眼窩内ノ溫度ハ

常ニ結膜囊内ノ温度ヨリ高温ヲ示シ四十二度一分ニ達セリ。尙ホザットレル氏ノ業績ニ依レバ十五分間「チアテルミー」ヲ使用スルトキハ三十分間温卷法ヲ施セル時ヨリモ多量ノ蛋白ヲ前房水中ニ證明スルコトヲ得タリ、是高閃電流ニ依テ毛様体血管ハ高度ノ充血ヲ惹起スルニ依ル、本法實驗中結膜囊内ニ於テ得タル最高温度ハ四十三度六分ニシテ、四十五度以内ニ於テハ角膜等ニ何等障碍ヲ與フルコトナシト雖モ強度ノ熱感ヲ與フルヲ以テ其以上ニ上昇セシムルコトハ戒メザル可ラズ、而シテ外皮ハ知覺神經ニ富ミ深部組織ヨリモ温熱的刺戟ニ感ズルコト著明ナレバ實際檢温計ヲ用キザルモ皮膚ノ知覺ニ依リ大凡温度ヲ推測スルコトヲ得ベシ、本法ノ實驗ニ依レバ眼窩内ノ温度ハ常ニ結膜囊ヨリモ一二度高キヲ知レリ、故ニ吾人ハ本法ニ依リ管ニ眼前部ノミナラズ眼後部組織モ四十一度以上ニ温熱シ著明ノ充血ヲ招來シ得ベシト。高閃電流ハ最モ短距離ヲ通りテ甲電極ヨリ乙電極ニ進行シ電流線ノ最モ密集シテ通過スル處ニ於テ熱灼現象最モ最強ナリ、故ニ強度暖熱力ヲ得ンガ爲メ大ナル無差別電導子ト小ナル差別電導子トヲ使用ス、甲ハ電流ノ一方ニ於ケル通路タルニ過ギザルガ故ニ疼痛感等ヲ惹起セザルベク比較的大ナル導子ヲ選ビ頂部等ノ中性ノ部位ニ著クル

ヲ普通トス、乙ハ電流ヲ作用セシメントスル局所即チ眼部ニ應用スル物ニシテ其面積小ナルヲ以テ密度大ニ從テ暖熱作用モ亦強甚ナリ。

本法ハ眼球及高閃電流ニ觸接セル組織ニハ何等障碍ヲ與ヘズ、唯一ノ作用現徴トシテ結膜血管及上鞏膜血管ノ強度充血ヲ見又乳頭ノ強度毛細管充血ヲ見タリ、全身の自覺的症狀トシテハ單ニ感覺過敏性ノ人ニ局所的刺戟ノ外違和ヲ訴フル者ナシ、而シテ本法ハ從來ノ療法ヨリモ迅速ニ種々ノ疾患ニ効果ヲ納メ得タリ、殊ニ角膜疾患虹彩及毛様体炎ニ有効ニシテ眼球ノ中部後部及球後組織ヲ暖熱スルニ最モ妙トスル所ナリ、然レドモ眼前部ノ疾患ニ對シテハ必要ト云フ可ラズ他ノ療法効果ナキ重症ニ對シテハ優秀ナル裝置ナリトス、硬化性角膜炎ヲ併ヘル上鞏膜炎ニ於テ何等施スベキ術ナカリシ時本法使用ニ依リ望外ノ卓効ヲ収メタリト、又三叉神經痛上下眼窩神經痛模樣体痛ニ對シ卓効アリ自覺的ニ快感アリテ注射療法ニ優ルコト明ナリ、最モ興味アルハ永ク脊髓炎ヲ患フル兩側性視神經萎縮症ニシテ僅カニ手動ヲ辨ゼン者五迷突ニテ二十四分ノ六ニ恢復シ視野ノ擴張ヲ見タリ。

本法ノ治療的作用ハ病的組織ニ強度電流ヲ放射シテ常ニ血液循環ヲ新鮮ニシ、之ニ依リテ自衛の元素ノ發生ヲ助

ケ以テ病的生成物ノ急速排除ヲ促スニアリ、其他疼痛輕減作用アリテ虹彩炎毛様体炎ニ對シ快感ヲ與へ、視神經萎縮ニ對シテハ強度血液灌注ガ尙ホ殘留セル視神經纖維ニ對シ營養狀態ヲ善良ニシ神經作用ヲ増進スルニ在ルガ如シ、高閃電流ニハ其新陳代謝興奮作用ノ外恐ラク細胞原核質ニ或ル特別ノ作用ヲ與フル者ノ如キモ尙ホ檢索ヲ要スル者トス。

本療法ノ禁忌症トシテハ眼内出血ノ傾向アル疾患血管硬化症及綠内障等トス、是レ眼壓昂進ノ作用アルヲ以テナリ、本法ノ血液灌注力ハ十分間ノ放射ニテ數週間「アトロピン」點眼ニ依ル極度散瞳ニ對シ直徑一・二密ノ縮瞳ヲ來ス、此作用タルヤ一見綠内障ニ良好ナルノ觀アリ、脊髓勞性縮瞳ニ對シテハ瞳孔直徑ニ變化ナシ、又水晶体混濁症ニ試ミシモ何等ノ効ナカリキ。

本法ヲ應用スルニ當リ其電導子ノ大サニ從テ電流及作用力ニ差異ヲ生ズルヲ以テ、吾眼科の應用ニ際シテモ各個人性ヲ考ヘ電導子ノ大サヲ左右セザル可ラズ、又其固定法モ患者ニ不快ヲ感ゼザル方法ニ依ル可シ、今ア、クウリン氏ノ考案ニ依レバ、電導子ハ項部及眼部ノ二導子ヨリ成リ頭部ノ周圍ヲ廻セル輪狀物ニ裝置セラル、輪狀物ハ發條的輕金屬ヲ用キ内側ハ褥ヲ付ク、固定輪ノ前頭及

後頭部ノ中央ニ橋狀裝置ヲ作り各導子ヲ附着シ、之レヨリ一定彎曲セル發條桿ヲ眼及項部ニ導キ其末端ニ各固有ノ金屬板ヲ裝置ス、項部板ノ下臺トシテ綿紗ヲ以テ被ヘル綿枕ヲ置ク、其大サ凡ソ半一仙ノ厚サヲ有シ金屬板ヨリ少シク大ナリ、眼部板ノ下臺トシテ綿紗ヲ以テ被ヘル纖細多孔性海綿ヲ適當大ニセル者ヲ稱用ス、綿枕及海綿ハ放電前ニ強濃度ノ微温食鹽液ニ浸潤セル者トス、尙ホ眼部板ノ固着前ニ特別ニ考案セル驗温器ヲ結膜囊内ニ挿入シ上部ハ輪狀物ニ固定セラル、如斯導子ガ良ク頭型ニ一致適合セルヲ見テ初メテ放電スベシ、又眼部導子形ノ者二個裝置スレバ顛顛部ヨリ顛顛部ニ又耳部ヨリ耳部ニ放電スルコトヲ得ベシ、其他電導子ノ位置ヲ相互ニ變更スレバ頭部ノ各部ニ「ヂアテルミー」の連絡ヲ構成スルコトヲ得ベシ。

(眼科教室加藤抄)

○野口氏「ルエチン」ノ診斷上ノ價值

殊ニ産婦人科の疾患ニ對スル臨床的價值

(日本婦人科學會雜誌第十三卷第一號)

太田耕作

著者ハ一二〇例ノ主トシテ産科婦人科の患者(常習性流産ノ既往症ヲ有スル婦人科患者の妊、産婦ヨリ生レタ

ル病的初生兒等)ヲ材料トシ、多クハ星製藥會社發賣ノ「ルエチン」(一部ハマルフオード製ルエチン)ヲ使用シテ、其ノ產婦人科の疾患ニ對スル臨床の價値ヲ研究シ結論シテ曰ク、

一、産科學上流早産ノ原因探究ニ際シテハ其ノ價値ワ氏法ニ及バズ。

二、第二期微毒ニ於ケル「ル」反應ノ陽性率甚ダ小ナリ。

三、「ル」反應ノ陽性率ハ潜伏期ニ於テモワ氏反應ニ優レルヲ見ズ。

四、然レドモワ氏反應ノ示サザル少數ノ場合ニ於ケル「ルエチン」ノ價値ヲ認ム。

五、特異性ハ絶對的ナラズ、非微毒ノ場合ニモ陽性ヲ呈シ得ベシト思ハルル理由アリ。

六、沃度劑服用中ニ注射セル「ルエチン」ハ殆ンド總テノ場合ニ丘疹ヲ生ズ、此ノ丘疹ハ陽性時ノ丘疹型ト比シテ區別困難ナリ、唯一般ニ發赤ノ度弱キガ如ク、經過ノ點ニ於テハ差異ヲ認メズ、彼レニ比シテ經過短シトノ説ニハ同意シ難シ。

七、此ノ現症ヲ呈スルモノハ沃度加里ノ内服時ニノミニ限ラザルヲ見レバ、遊離沃度ノ作用ニ因ルモノナルベシ。

八、沃度加里内服ノ際皮膚ヨリ排出サレタル沃度加物ガ酸性ナル汗、皮脂ノタメニ沃度水素酸ヲ生ジ之レヨリ遊離セル沃度ガ皮疹瘡瘍ヲ生ズルガ如ク遊離沃度ガ注射ニヨル炎症ヲ助クルモノト考ヘラル。

九、尿中沃度ヲ見ザルニ至リテ注射セルモノノミナラズ、沃度劑ノ内服ヲ中止シ尿中ソノ痕跡ヲ認ムルノミニ至リシ場合ニ注射セルモノモ陰性ノ時ト同様ニ經過ス。

十、單獨性炎症トノ差異明確ナラズシテ陰陽ノ區別困難ナル場合少カラズ。

十一、外來患者ニハ應用困難ナリ。

十二、「ル」反應ノ單獨應用吾人ノ探ラザル處ナルワ氏反應ヲ併用セバ理想ニ近カラン。(婦人科學教室波々伯部抄)

○一側卵巢變化ノ他側卵巢ニ及ボ

ス影響ニ就テ

(近畿醫學會々報第五號)

大原盛三

著者ハ家兔ニ於テ一側ノ卵巢ニ對シ亂刺、燒炳、種々ナル藥液注射等ノ處置ヲ施シ一定時日後他側卵巢ヲ檢査シ次ノ結論ニ到達シタリ。

一側卵巢ノ實質ニ壞死ニ陥レル部分アルトキハ他側卵巢ニ組織的變化ヲ來タス。(原卵細胞ノ消失、萎縮。グラ―フ氏胞ノ閉鎖狀變性。間質腺細胞ノ染色減退等)之レニ依リテ炎症性卵巢疾患ガ通常兩側ニ來ル所以ハ其局所解剖學的ニ隣接セルニ由ルノミナラズ。一側卵巢ノ強ク侵サルル爲他側卵巢ハ其影響ヲ受ケ炎症ニ罹リ易キ素因ヲ與ヘラルルニ由ルモノナルヲ信ゼント欲スト。

(婦人科學教室織田抄)

漫 錄

●眼病ト食養生

ドクトル 辻本辰之助 (三三)

吾等ハ日常其ノ取扱フ眼病患者ノ多數ヨリ食養生所謂毒斷チニ就キ指示ヲ乞ハル、ニ際シ刺戟性物、強烈ノ芳香性物、飽食暴飲ヲ禁スルニ止ルモ患者ハ是レニ満足セズ個々ノ食品ヲ擧ケテ禁否ヲ問フニ當リ屢々自信アル明答ヲ與フルコト能バサル場合多シ而シテ彼等ノ食養生ニ對スル頗ル嚴格ナルヲ常トシ譬ヘ吾人ノ支障ナシトスル食品モ舊來ノ傳説口傳ニ眼病ニ禁忌トスルモノハ容易ニ口ニセサル風アリ斯ク食養生ニ重キヲ置クハ恐ク舊時漢法醫ノ之レヲ格守セシムルコト嚴ナリシ習慣ノ遺風ナルカ或ハ病者多年ノ經驗ヨリ按出シタルモノ、不文律ト成リシモノナルベシ。

吾ガ地方ニ於ケル眼病者ノ禁忌トスル食品幾多ナルモ其主ナルモノハ糯米

及ヒ是レチ原料トスル餅、赤飯、筍、油濃キモノ即チ脂肪ニ富メル魚類就中鰯又タ好食品トシテ八ツ目鰻、雀、同卵等ナリ。

今は等ノ食品ガ將タシテ眼疾ニ好惡ノ影況ヲ與フルカチ考フルニ然ル特異ノ作用アリトハ成ス能ハサルモ餅、赤飯ハ村落ニハ年中贈答ノ機會多ク隨テ多食シ飽食ガ或ル場合ニ惡果ヲ來スコト在リ得ルト成サレサルニアラズ又タ筍、鰯ハ四、五月頃季節上ノ流行物ニシテ安價ナル爲メ月々ノ食膳ヲ賑ハスコト類繁ニシテ多食シ易ク結膜炎ヲ有スル主婦ハ之ノ鰯チ炙リ烟ニヨリテ増悪セラレ易ク且ツ又タ此ノ季節ハ眼病ノ多キ時ナレハ此種ノ食品ニ依リテ原因セリト速斷セルニアラサルカチ疑フノ他ナキモ漢法ニハ糯米、鰯チ眼病者ノ禁食品中ニ入レアリ好食品中ノ八ツ目鰻ハ其ノ魚名ニ因縁スル迷信ナルガ如ク雀ニ就テハ日華曰ク陽事ヲ壯ニシ氣ヲ益シ腰膝ヲ暖メ小便ヲ縮メ血崩帶下ヲ治シ孟談ノ曰ク精髓ヲ益シ五臟不足ヲ補フ陳器ノ曰ク冬三月チ食ヘハ陽道ヲ起シ人チシテ子アラシム又タ雀卵ハ別錄ニ曰ク五月卵ヲ取リテ食ヘハ氣ヲ下シ男子ノ陰莖ナヘテ起サルチ強シ熱セシメテ精多ク子アラシムトアリ是ニ依テ考フルニ雀及其卵ハ精力増進ノ効アリトセラレタルガ如シ爲メニ視力減退ガ身体ノ衰弱精力減少ニ起因ストシテ之レチ賞食スルニ至リタルニ非ラサルカ。

要スルニ斯ル禁好物ノ區別ハ漢法ヨリ出テ今日尙ホ一部ノ人ノ信仰ヨリ脱セサルモノナラン然ラハ漢法醫ハ何ニ據テ是等ノ食品チ區分シ得タルカ恐ク經驗ヨリ得タルモノナラン而シテ彼ノ往時靈藥トセラレタル人參ガ現時其効力ヲ復活セルガ如ク雀卵ヨリ「ヨヒンビン」ノ發見セラル、迄テ吾人ハ其當否ヲ述フル能ハズ。

保養食物大成ニ左ノ區分アリ。

「眼目好物」。黑豆、黑胡麻、欵冬、苳、藕、山芋、午莠、零餘子、莧、樨、枸杞、棗、桃、薺、小豆、蔞、陸蠶、鯉、鱈、田螺、海螺、鰻、鰵、鰮、雲雀、

石決明、炒海鼠、風眼ニハ葱白、芥子、獨治、

「同禁物」。酒、油、薑、蒜、葱、蕎麥、蕨、莖、栗、芥、山椒、胡瓜、葫、
五旁、麩、糯、煎大豆、海鹿尾、蓼、茸、鮭、鮎、鯛、鱒、鱧、鱧、
鮑、鮑、鱈、鱈、烏賊、鱈、河魚、鴨、山鷄、鳩、鷺、鴨、鷺、熊、猪、
狸、

諸生冷物、生芋莖、刺レ頭出レ血事、夜讀ニ細書ニ事、向レ烟事、房室、見レ
日事、雪中、力所作、湯、風呂。

右ノ禁好食名中吾人ノ直ニ首肯シ得ル二三ノモノ、他多クハ不可解ナルモ
是等ハ多年ノ經驗上ヨリ得タルモノナルベシ故ニ舊醫ノ言採ルニ足ラズト
成サズ現代醫士ノ研究必用ナラズトセズ。

其他要点ヲ摘録セハ

一、蚌、孟談曰、眼赤ヲ去ル、藏器、目ヲ明ニス。

二、海鼠、眼ノ痛ヲ治ス。

三、鳩、嘉祐目ヲ明ニス。

四、卵白、別錄目熱シテ赤痛ミヲ除ク。

五、萹苳、陳器眼目ヲ明ニシ、李延久シク食ヘハ目ヲ眠クス。

六、車前、本經、精ノ泄ヲ治シ尿血ヲ止メ五臟ヲ補ヒ目ヲ明ニス。

七、蕨、孟談久シク食ヘハ目ヲ暗クス。

八、芥子、時珍多ク食ヘハ目ヲ眠クス。

九、同葉、別錄目ヲ明ニス。

十、樾、孟談同上。

十一、田羸、別錄、目熱シ赤ク痛ヲ治ス。

十二、蕎麥葉、氣ヲ下シ耳目利ス。

十三、鷓、入門腦ト菴實ト和シテ食ヘハ目ヲ明ニシ夜ヨク細字ヲ見セシ

40

十四、班鳩、嘉祐目ヲ明ニス。

十五、茄子、季進秋後ニ食フコト多クレハ目ヲ損ス。

十六、獨治、少シ食フベシ目赤ク腫レ痛ミ小瘡アルモノニ用フベカラズ痛
ミ痒ヲナス。

十七、萱草、目ヲ明ニス。

十八、烏芋、孟談粉ニシテ食ヘハ耳目ヲ明ニス。

十九、黑豆、炒テ食ヘハ痺ヲ除キ腹ノ脹リヲ止メ食ヲ消シ目ヲ明ニス。

二十、薯蕷、本經久シク食ヘハ耳ヲ聰シ目ヲ明ニス。

二十一、鯉、具瑞目亦クシテ痛ミ痒クシテ涙ヲ出ス等ノ症ニ鯉ノ膽ニ片腦
ヲ研和シテ目皆ニ点スレバ青盲ヲ治ス。

鯉魚ヲ炙ルニ其烟眼ニ入レハ目ノ光ヲ損ス。

二十二、赤小豆葉、日華、煮テ食ヘハ目ヲ明ニス。

二十三、胡葱、孟談久シク食ヘハ神ヲ破リ性ヲ損シ多ク物忘レ目明ヲ損シ
血脈ヲ絶ス。

二十四、通草、淋病ヲ治シ渴ヲ止メ目ヲ明ニス。

二十五、鯨、關甫按ニ精ヲ益シ身ヲ輕クシ目ヲ明ニス。

二十六、椒紅、久シク食スレハ腠理ヲ開キ血脈ヲ通シ目ヲ明ニス。

二十七、芡實、本經中ヲ補ヒ暴ニ病ヲ除キ精氣ヲ益シ志ヲ強クシ耳ヲ聰シ
目ヲ明ニス。

二十八、葱、別錄目ノ精ヲ益ス。

二十九、酒、陳器熱飲ナレハ肺氣ヲ傷リ目ヲ損ス。

三十、串鰓、鹽麩、目ヲ明ニス。

過度ノ食物養生、所謂毒斷チハ健康ヲ害シ疾病ノ經過ヲ不良ナラシムルハ
云フ迄モナシ然ルニ眼病者ノ屢々之ノ過誤ニ陷ルモノアルヲ知リ茲ニ之
文ヲ草シ以テ識者ノ高教ヲ仰クト爾云。

雜報

●金澤市醫師會議員會 同會は舊冬十二月十六日午後七時より大手町醫師會堂に於て開會し本年度歳出入豫算案は異議なく原案通り可決し尙本年當金澤市に於て全國結核豫防聯合會開催さるゝ豫定なれば其際市醫師會主催となりて石川縣結核豫防會、石川縣赤十字社支部、石川縣醫師會と合同し結核豫防展覽會を開會することに決し此が準備費として金五拾圓を支出し、同委員として上田計二、飯森益太郎、米村吉太郎、福岡喜洋、島誠郁、池田美翼、田中一次郎、三木三郎、山田孝太郎の九氏を舉げ準備することに決し同十一時散會したり。

●保健衛生調査官増員 昨年末閣議に於て決定せる保健衛生調査費三萬九千六百圓の内約七千圓を以て技師勅任一名、奏任一名、保健衛生調査會專屬事務官一名其他技手、屬各三名を何れも増置する事に決定したり。

●伏木港檢疫所設置 大正五、六の二箇年間に亘り裏日本方面に傳染病續出し其被害甚大にして殊に富山縣伏木港に露領沿海州及浦邊方面との海路往復頻繁なるより同港に海港檢疫所を新設すべく豫て同縣醫師會及び大日本醫師會にて決議し内務省に稟請中なりしが内務省にては一應検査の上愈設置すべく略決定したりと。

●官立醫學專門學校規程改正 去月八日文部省令第一號を以て官立醫學專門學校規程中一部左の通り改正の旨發表せらる。
第三條學科課程表中醫學科ノ部「內科學」ノ欄中ヨリ小兒科學ヲ削リ

「法醫學」ノ欄ノ次ニ「小兒科學」ヲ加フ

而して同時に小兒科學は第三學年に於て毎週一時間以上理論及臨床講義を課すべく規定せられたり。

●第四十七回金澤病院醫事集談會 大正七年一月廿四日午後二時半より眼科診察室に於て開催、左の講演ありたり。

一、レントゲン線ノ一、二生物的作用 小池 醫 員

質問、追加。中村教授、土肥部長、田村部長、

二、後鼻孔ノ「ゴリープ」ニ就テ 越 村 醫 員

(標本供覽)

校內消息

●新年拜賀式 大正七年一月一日午前九時より本校大講堂に於て新年拜賀式舉行せらる、全刻職員生徒一同入場次で校旗と共に校長入場の後一同整列御眞影に對し最敬禮を行ひ高安校長は恭しく新年賀詞を捧呈せられ終りて垂張の後校長の發聲にて 兩陛下の萬歳を三唱し次で醫學科第四學年上出成之君は校長以下職員に對し生徒一同を代表して賀詞を述べ又高安校長は職員一同を代表して生徒一同に對して賀詞を交換せられ全十時閉式せり。

●本校規則中改正 本校に於ては今回規則中左の通り改正せり。

一、第一章第三條醫學科課程及授業ノ時數表中內科學ノ内「小兒科學」ノ欄ヲ削除シ「精神病學」ノ次ニ左記ノ「小兒科學」ヲ追加ス、(但し此項は前記雜報欄の如く文部省令の結果に基く者なり)

學科	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
	每週教授時數	每週教授時數	每週教授時數	每週教授時數
小兒科學 臨牀講義			一以上	
理論及 義				

一、第六章第二十九條中醫學科後期試問學科目ノ次ニ左ノ但書ヲ追加ス、
但前記科目ノ成績ニ精神病學、法醫學ノ學年試驗ニ於ケル得点ヲ加フ
●石坂教授記念品 曩に石坂先生學位を受領せられし際祝賀會を開かむ
として學生諸君の贈金を仰ぎしも先生の辭意固くして醜す事能はず依て
生等聊か先生の榮譽を永久紀念せむ爲其の贈金を擧げて左の如く取り計
ひたり。

- 一、鑄銅製唐獅子置物 一個 紀念館に寄附
- 一、醫療器具 數点 學術實習部に寄附

収入總額金百四圓四拾錢也 醫學科生徒一同贈金
支出總額金百四圓四拾錢也

- 内譯 金六拾圓也 置物 一個
 - 一金四拾錢也 雜費
 - 一金四拾四圓也 醫療器具
- 醫學科第四學年幹生一同
終りに報告の趣意を謝す。

會 報

十全會大阪支部會記事

會 報

●木村孝藏博士在職三十五年 祝賀會兼秋期總會

大正六年十一月十七日午後八時より大阪を中心とせる金澤醫專同窓會員相
謀り母校主事兼金澤病院長兼外科醫長たりし木村先生の祝賀會を大阪南區
南海驛前明月樓に於て開き來會者三十餘名幹事總代濱地藤太郎氏の開會の
辭と次て記念品目錄贈呈次に黒川靈富氏の祝辭木村先生の謝辭あり。
終りて秋季總會に移り石黒三千雄氏の會務會計報告あり本日を下し金澤醫
專同窓會々旗を新調し會員の慶吊に使用することとし本日會員一同は木村
先生の懷舊談を靜聽し恍惚として本一夜は金澤にあるの心地し愉快に牛飲
馬食各自歡を盡し午前一時散會せり、自今隔月一回大阪市内の會員は茶話
會を開會することとせり、尙本日當番幹事選舉を行ひたるに左記當選快諾
せられたり、最後に金澤醫專の萬歳を三唱するに共に木村先生の萬歳を三
唱せり。

在大阪金澤醫專同窓會當番幹事

濱地藤太郎、石黒三千雄、東 義雄、岸田藥劑士

●金子博士並に先輩卒業生諸氏歡迎會

去る十一月三日大阪醫科大學教授木村博士在職三十五年祝賀會に母校より
金子先生并に先輩卒業生諸氏の來坂を好期とし在阪十全會支部同窓生相謀
り大阪南地明月樓に於て午後五時より歡迎會を開き來會者二十餘名小島佐
藏氏歡迎の辭を述べ異境にて先生の尊顔を拜し舊を談し新を語り氏名點呼
をなし後金子先生の謝辭あり同九時散會せり尙本日金澤より藤井伊之吉、
山田孝太郎の阿氏先輩出席せられたるは一層會合を盛ならしめたり。

※ ※ ※ ※ ※

叙任及辭令

(十二月廿一日)

叙正六位

從六位 駒形重光

●内務省

(十二月十日)

八級俸下賜

富山縣技師 駒形重光

●石川縣

(十二月十九日)

八級俸給與

金澤病院醫員 小池才一

十級俸給與

全 壺村和喜男

全 上

全 織田他家男

(大正七年一月十六日)

願ニヨリ職務ヲ免ス

金澤病院醫員 太田尙男

●金澤醫學專門學校

(十二月十日)

依願雇ヲ解ク

金澤醫學專門學校雇 堀木勇治

(大正七年一月廿三日)

雇申付

平澤又吉郎

月俸金拾貳圓給與、圖書課員ヲ命ス

叙任及辭令 人事

(十一月廿七日)

叙勳五等授瑞寶章

正七位勳六等 林 常雄

●賞勳局

(十一月廿一日)

陸叙高等官四等

富山縣技師從六位 駒形重光

●内閣

(十二月廿一日)

陸叙高等官五等

京城醫學專門學校教授正七位醫學博士 久保 武

●内閣

(十二月廿二日)

任臺灣總督府技師

臺灣總督府醫院醫官補 池 上 豐

叙高等官八等

民政部警察本署衛生課勤務ヲ命ス

(十二月廿五日)

任陸軍二等軍醫正

陸軍三等軍醫正正六位勳四等 高 岡 榮

補鐵嶺衛戍病院長

任陸軍一等軍醫

(十二月廿六日)

陸軍二等軍醫從七位 北川 文松

公立專門學校教授正五位勳四等醫學博士 木村 孝藏

陸シテ高等官三等ヲ以テ待遇セラル

●宮内省

●宮内省

●宮内省

●宮内省

●宮内省

●宮内省

人事

●池上 豐氏(四四)

臺北醫院に勤務の同氏は今回臺灣總督府技師に任

せられたり。

●眞下信一郎氏(大正四) 朝鮮總督府醫院整形外科新設となりたる爲め同科に赴任。

●矢吹 清氏(四三) 奉天滿鐵醫院に勤務の同氏は今回京都醫科大學外科學教室に於て研究、因に全氏は既報の如く滿鐵醫院より瑞西國へ留學を命ぜられたるも都合により延期せられたるが爲めなり。

●内海元二郎氏(大正五) 京都醫科大學小兒科に研究中なりしが舊臘京大病理學教室に轉科研究。

●青山太郎氏(大正六) 金澤病院小兒科に研究中の同氏は昨暮補欠として敦賀歩兵第十九聯隊第六中隊に入營。

●谷澤 碩氏(全) 神戸市賀古病院に赴任。

●本田盛正氏(全) 一年志願兵として金澤歩兵第三十五聯隊第六中隊に入營。

●中橋賢造氏(全) 同上。

●野澤寛二氏(全) 同、高田歩兵第五十八聯隊第八中隊に入營。

●林戸正之介氏(大正三) 京都大學耳鼻咽喉科に於て和辻博士の下に研究中の處今回新潟市長谷川病院へ赴任せらる。

●駒形重光氏(二三) 富山縣衛生技師駒形氏は昨夏來病氣療養中の處奮冬十二月終に逝去せられたり氏が職中は全縣衛生課長として事績は極めて多く殊に一昨年來全縣下虎疫流行の際には殆んど寢食を忘れ防疫に務め効績大なる者ありしが不幸其間病を得て復起せず惜むべしと云ふべし茲に謹んで吊意を表す。



會 告

會 告

●自大正六年十二月廿一日校外特別會員會費納付調書
至全 七年一月廿四日

氏 名	金 額	期 限
小幡學 雄殿	一金貳圓五拾錢	大正六年度分
黑田孝 夫殿	一金貳圓五拾錢	全
岡一 雄殿	一金貳圓五拾錢	全
赤尾肇 三殿	一金貳圓五拾錢	全
齊藤義 雄殿	一金貳圓五拾錢	全
中西與三次 郎殿	一金貳圓五拾錢	全
石川重 吉殿	一金貳圓五拾錢	大正七年度分
角田耕 六殿	一金貳圓五拾錢	大正六年度分
有壁一 雄殿	一金貳圓五拾錢	全
鈴木 忍殿	一金貳圓五拾錢	全
太田勘 市殿	一金貳圓五拾錢	全
秋野定 吉殿	一金貳圓五拾錢	全
小山庄 治殿	一金貳圓五拾錢	全
高辻喜 作殿	一金貳圓五拾錢	全
佐野愛 二殿	一金貳圓五拾錢	全
吉見昌 造殿	一金貳圓五拾錢	全
江藤潤 一殿	一金貳圓五拾錢	全
松田 隆殿	一金貳圓五拾錢	全

一金貳圓五拾錢	大正六年度分	富久尾	湊殿
一金貳圓五拾錢	全	清水義	成殿
一金貳圓五拾錢	全	澁谷孝	慶殿
一金貳圓五拾錢	全	棚田喜久	雄殿
一金貳圓五拾錢	全	久高唯	忠殿
一金貳圓五拾錢	全	白石福三	郎殿
一金貳圓五拾錢	全	越田信	吉殿
一金貳圓五拾錢	全	田中吉左衛門	殿
一金貳圓五拾錢	全	吉井康次	郎殿
一金貳圓拾錢	全	青木伸	一殿
一金貳圓五拾錢	全	近藤勇	記殿
一金貳圓五拾錢	全	秦親	眞殿
一金貳圓五拾錢	全	山科他喜	雄殿
一金貳圓五拾錢	全	木根淵	清殿
一金貳圓五拾錢	全	藤澤好	彦殿
一金貳圓五拾錢	全	小山田	基殿
一金貳圓五拾錢	全	梶川甚	一殿
一金貳圓五拾錢	全	喜多養	元殿
一金貳圓五拾錢	全	加瀬順之	助殿
一金貳圓五拾錢	全	宮崎稻	作殿
一金貳圓五拾錢	全	神原	久殿
一金貳圓五拾錢	全	下條正	夫殿
一金貳圓五拾錢	全	菱川瀧	太殿
一金五圓也	大正七年度	森田齊	次殿
一金貳圓五拾錢	大正八年度	月岡勝	治殿
一金貳圓五拾錢	大正六年度分		

以上

新刊紹介

●増訂「梅毒」(全一冊)
再版

曩ニ發刊セル者ヲ新ニ増補シ最近刊行セラレタル本書ハ田原教授ノ「梅毒」ノ傳染及ビ病理解剖概要、小川教授ノ「スピロヘータ、パルリダ」ノ形態、生態及ビ血清反應、旭教授ノ診斷及ビ治療ニ、次テ久保、稻田、高木、今淵、伊東ノ各教授及ビ助教教授ハ皮膚、神經系統、上氣道、循環器系統、泌尿生殖器、徵毒ト生殖機能、遺傳徵毒ノ各系統ヲ逐ツテ分擔執筆シ別ニ三田助教教授ノ徵毒ノ外科ヲ増補シテ錦上更ニ花ヲ添ヘタリ、三三版三百六十頁、着色圖版其ノ他多數ノ挿圖アリ猶ホ本書ハ幾分ノ殘部アルヲ以テ實費金參圓ヲ徵シ希望者ニ頒布スト。(非賣品△九州醫科大學雜誌部發行)

正。誤。

本誌一月號校內消息欄中本校生徒募集入學志願者心得條項の内第七項中の但し書以下は削除す。

謹賀新年

藏光長次郎

在米國セント、ルイス